
エンジェルクリスマス

月影れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェルクリスマス

【Nコード】

N1450J

【作者名】

月影れん

【あらすじ】

大切な人へのクリスマスプレゼントを買いにきた蘭と哀。——そんな二人は白い天使と白になりきれない灰色の天使。

カップリング）蘭&哀、新一×蘭、哀↓比護

（前書き）

カップリングは蘭×哀、新一×蘭、哀↓比護です。

小さな身体を震わすほどの冷たい風が、先のとがった氷柱のように頬にぶつかった。

すれ違う人達は、コートなどを羽織り、寒さを凌ぎながら歩いていた。私も例外ではない。今の私に最も似合っている黒いコートを着ている。

そんな中、街には讃美歌が流れ、それに合わせて街も忙しく動いていた。この寒さを吹き飛ばすくらいの活気に満ち溢れているのでは、とすら思えた。

そんな街の様子に、私はふと唐突に思い出した。そして、私は少し切なくなる。——でも……。

——安心して。お姉ちゃん。私には今、大切な人がいます。

あまりの息苦しさで熱気に、圧倒された。普段なら、持ち合わせの体力でこれくらい突破できるけど、今の私にはある考えがあった。そして、あがくこと約数分、ようやく人混みの中から解放された。私は、クリスマスプレゼントを買うために、話題のデパートへと行った。このデパートに売ってある商品は人気で、毎年クリスマスシーズンになるとこんな感じになる。

でも、今日は諦めよう。あいつにプレゼントを買ってやろうと思う

てたけど。

——新一。今、あなたはどこにいるの？

「「あ……」」

二人はほぼ同時に声をあげた。

赤みがかった茶髪の少女と、艶めいた黒髪の少女。彼女達の間には何やら対照的なオーラが漂っていた。

「あら、哀ちゃんじゃない？」

と、黒髪の少女——蘭は、明るい声を出す。彼女のその明るさに、哀と呼ばれた少女は少々たじろいでしまった。

「こ、こんにちは」

「もしかして、哀ちゃんもクリスマスプレゼントを買いにきたの？」
蘭は哀の目線までかがみ、まるで天使のように微笑んだ。

哀はなぜかそんな蘭に対して照れを感じてしまう。

「ええ、そんなところよ。でも、人が多くてあのデパートに入れな
いの」

と、”それ”を押し隠すように、淡々とした口調で答えた。たしかに、あの人混みの中、この小さな体ではいとも簡単に押し潰されてしまうだろう。

「そうだったの……。実は私もなの。だから思わず人混みから抜け出してきちゃった」

「……あなたほどの体力ならあんな人混みなんで」

「うん。でもね、今日の占いで、『あまりパワフルな行動は慎みま
しょう。待ち人に会えるチャンスを逃します』って出ちゃったの
よ」

「……そう」

と、哀は返した後、一瞬切なげな、そして申し訳なげな表情をしたことに、蘭は気付かなかった。

蘭と哀は、しばらく二人で歩いていた。

蘭は明美に似た雰囲気……何かを持っている。

柔らかく繋がれた蘭の温かい手も、

「今日は寒いね」とか、「今日は何をするの?」とか、そんな雑談も、どれも明美を連想させて哀はどこか心地よさを感じた。もちろん蘭にとっても。

「……なんかお姉ちゃんみたい」

哀の心から思わず漏れてしまったその言葉。蘭はそれにそつと反応した。

「哀ちゃん、お姉ちゃんがいたの?」

「ええ」

「そうなんだ。私も哀ちゃんのお姉ちゃんに会ってみたいな」

哀は自らの顔に静かに影を落とした。

「……ごめんなさい。それは出来ないわ。私のお姉ちゃんは半月ほど前に亡くなったから」

蘭はそれを聞いて、はっとした顔になる。

「う、ごめんなさい。哀ちゃん……。私知らなくて。本当にごめんなさ——」

「……いいの。気にしてないから。お姉ちゃんはもう帰ってこないんだから」

「哀ちゃ——」

哀は少し驚いた。蘭はその綺麗な瞳に涙を溜めていたのだ。そして、哀は心の中で少し笑う。

——天使さん……。

「ほら、泣かないで。行くわよ」

「あ、哀ちゃん待って」

——こんなところもお姉ちゃんに似てるのよね……。

「プレゼント買うの、あのお店にしない？」

「そうね」

そこは、なかなか洒落たデザインのこじんまりとした店だった。主に女子高生に好まれる店らしい。そんな感じの人達が結構いるのが見受けられる。

ガラス越しで、可愛いらしい商品が並んでいるのが見えた。それらを見た哀の瞳は、輝きを放っていた。それに気づき、蘭はくすりと微笑んだ。

「よし、私はこれにしようかな」

蘭はそう言い、ペアのマグカップに触れた。

2つ合わせれば、ハートのマークになるようだ。それと、可愛いらしくデフォルメされたクマのイラスト付きのマグカップを一つ。

蘭は、ペアのマグカップをひっつけ、どこか遠い目をしていた。

哀には、蘭が何を…誰を想っているのかは予想がついた。

「あら、かわいい」

「哀ちゃんが持つてるのもセンスあるよ」

「そう？」

哀は、自分が選んで持っている青のマフラーに視線を落とした。

「それは誰へのプレゼントなの？哀ちゃんに貰う人、羨ましい♪」

「えっ」

思いもよらないことを唐突に尋ねられ、哀は思わず顔を赤くし、うつ向いてしまった。そんな哀の様子を見た蘭は慌ててしまう。

「あ、ごめんね……。言いたくないなら——」

蘭は、言いかけて止めた。

哀が、自分を真っ直ぐ見つめていたからだ。こんなにも目を合わせてくれたことは、今までにあっただろうか。

緑かがった蒼い瞳。それは吸い込まれそうなほど澄んでいて、蘭は思わずドキリとした。

「——私のお姉ちゃんと同じくらい、大切な人よ」

——私には到底手の届かない人だけど。

どうせその人にプレゼントは渡せないけど。なのに、なんでこんなプレゼントを買ってしまったのよ。

「そっか……」

蘭はどこか安心したように、優しく微笑んだ。

だが、チラリと見せた哀の切なげな表情に気付き、ほんの一瞬だけ複雑な表情をした。

——理由は聞かない方がいいような気がする。

二人は店を出る。お互いの大切な人に渡すクリスマスプレゼントを抱えて。

二人が歩く外は相変わらず寒い。だが、二人は家へ帰るためにただ歩く。（蘭は哀を送ると言って聞かなかった）

その途中、蘭は「あっ」と思い出したように、自分のバッグの中をゴソゴソと探った。哀はそんな様子をただ見守っていた。

「あ、これ、哀ちゃんにあげる」

「え？これって……」

哀は目を見開いた。その瞳は綺麗に光っているようにも見える。

「うん、そうよ。今度のビッグ大阪とノワール東京の試合のチケット。哀ちゃんって、ビッグ大阪の比護選手のファンなんでしょ？博士から聞いたの」

たしかに、蘭が持っているのはクリスマスにある、サッカーの試合のチケットだ。哀は頬を桃色に染め、上目づかいで蘭を見ながら、
「ありがとう」

と呟き、それを受け取った。

——もしかしたら”彼”にプレゼント渡せるかも。

「あつ。でもチケットは一組分しかないから、探偵団のみんなと行けないわね……」

「いいえ、いいわ。みんな、東京スピリッツのファンなんだから」

「そうよね……」

蘭は少し困った顔をしている。哀はそれを少しだけ面白がる。

「うーん、博士と？」

「いいえ。私と一緒に行ってくれない？——クリスマスのこの試合」

「え？」

「だから、私と」

哀は静かに微笑む。

蘭の顔にはパアッと笑顔が咲いた。

「あ、わ、私でよければ。——ありがとう」

「それはこっちのセリフよ。ありが——」

ふわり。体が柔らかく浮く感覚。優しく、懐かしい感じがした。

蘭は哀の身体を優しく抱きしめていた。

「哀ちゃん、ありがとう。大好き。私にはなんでも話していいんだ

よ」

「……温かい。でも、お姉ちゃんの変わりにはならないわ」

「あ、そうだね。ごめん……」

「いいえ、あやまることはないわ。お姉ちゃんはお姉ちゃん。あなたはあなた。でも、あなたは私にとって優しい蘭お姉ちゃんだから」

「哀ちゃん……」

——江戸川君、ごめんなさいね。今だけは彼女は私のものよ。焼きもちなんて焼かないで。

彼女を一時だけでも奪ったそのお詫びとってはなんだけど、彼はアポトキシンの解毒剤のサンプルをプレゼントしようかしら。彼女にとってもいいクリスマスプレゼントになるでしょうから。ふふ、今度は私が彼に嫉妬する番ね。

——なんでかな？新一に逢えるような気がする。
哀ちゃんありがとう。なんでかわからないけど……。

柔らかく舞う粉雪が二人を優しく包んでいた。
まるで天使の羽根のように……。

白い天使と白になりきれない灰色の天使。

（後書き）

去年と同様、クリスマスギリギリにアップです。
ふへー、疲れた。

最近、コナン×蘭と哀×比護にはまっています。
え？連載の方？申し訳ありません！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1450j/>

エンジェルクリスマス

2010年10月28日03時11分発行